

編集後記：今年の夏は、7月28日～8月1日、バンクーバーで開催された米国気象学会主催第12回「境界層と乱流」シンポジウム (BLT12) に出席しました。会場となったプリティッシュ・コロンビア大学はとてつもなく大きい大学で、東大通り (つくば市のメインストリート) 並の学内道路がありました。BLT12は、1968年に実施され、世界の気象学会に大きなインパクトを与えたカンザス野外実験の30周年記念大会で、関連する記念行事が行われました。この野外実験に参加したBusinger ワシントン大学教授ほか8名が壇上に上がり、カンザス野外実験の成果と影響についてパネル討論が行われました。当時、日本で開発された超音波風速温度計の果たした役割、カルマン常数の変動幅などが話題になっていました。私は都市境界層のセッションで、環八雲の観測結果を発表しましたが、反響は上々でした。

運営面からみると、BLT12は「インターネット大会」の観がありました。発表申込、アブストラクトの投稿、プログラムの作成と変更、ホテルの予約など、ほとんどすべてのことがインターネットを通じて行われました。BLT12の発表論文は300編を越えていました。肥大化と形式化の進みつつある大会運営に対して、このシンポジウムでは新しいいくつかの運営方式が取り入れられていました。近い内に、BLT12の紹介を「天気」に書きたいと思います。

さて現在、天気編集委員会では、査読のあり方につ

いて検討しています。投稿者とレフリーの意見が激しく対立することがあります。論争にエネルギーを使い、肝心の論文そのものの改善がおろそかになったり、両者の感情的な対立をまねいたりすることがあります。残念なことだと思います。編集委員会では関連の学会における査読者の心得・指針等を収集し、議論しました。

いくつか紹介しますと、「査読者は添削者でも共著者でもないで、文章表現や論旨展開について、自分の考えを押しつけない」、「大幅な追加実験・観測・解析を必要とするような、過大な修正要求は避ける」、「著者あての査読意見では、著者を傷つける恐れのある表現を避け、…」(日本農業気象学会)。「査読者は、著者と意見が違っても、それは論文等を不採用とする理由にはならない。」、「…完全な証明がないことを理由に論文を受理しないというようなことは避けるべきである。」(水文・水資源学会)。一つの解決方法として、「質疑と回答」の形式で、「天気」誌上でオープンに議論する方法があると思います。編集委員会では、近々、査読に関する内規をまとめることになりました。

また、新企画についても検討を始めています。「気象だより」=身近に起きた興味ある現象について簡潔に報告するもの、「普及講座」=新たな会員あるいはその予備軍とも言える気象予報士の方々をターゲットとした分かりやすい解説、「編集委員会コーナー」などです。皆様のご意見・要望をお寄せ下さい。(甲斐憲次)